

# 人形使い

豊島与志雄

青空文庫



むかし、ある田舎いなかの小さな町に、甚兵衛じんべえといういたって下手へたな人形にんぎょう使つかいがいました。お正月しょうげつだのお盆ぼんだの、またはいろんなお祭りまつりの折おりに、町の賑にぎやかな広場ひろばに小屋こやがけをして、さまざまの人形にんぎょうを使つかいました。けれどもたいへん下手へたですから、見物けんぶつ人がさつぱりありませんで、非常ひじょうに困こまりました。「甚兵衛じんべえの人形にんぎょうは馬鹿ばか人形にんぎょう」と町の人々たうじんはいっていました。

甚兵衛じんべえは口惜くやしくてたまりませんでした。それでいろいろ工夫くふうをして、人形にんぎょうを上じょう手ずに使つかおうと考えかんがえましたが、どうもうまくゆきません。しまいには、もう神様かみさまに願ねがうよりほかに、仕方しかたがないと思おもいました。

どの神様かみさまがよかろうかしら、と甚兵衛じんべえはあれこれ考えかんがえてみました。町にはいくつも神お社み社やがありました、上じょう手ずに人形にんぎょうを使つかうことを教おしえてくださるようなのは、どれだかわかりませんでした。さんざん考えかんがえあぐんだ末すえ、いつそ人のあまり詣まいらぬ神お社み社やにしようと、一人ひとりできめました。

町の裏手に山がありまして、その山の奥に、淋しい神社が一つありました。甚兵衛は毎日、そこにお詣りをしました。あたりには大きな杉の木が立ち並んでいて、昼間でも恐ろしいようなところでした。けれども甚兵衛は一心になつて、どうか上手な人形使いになりますようにと、神様に願いました。

ある日のこと、甚兵衛はいつものとおり、その神社の前に跪いて、長い間お祈りをしました。そしてふと顔をあげてみますと、自分のすぐ目の前に、真黒なものがつつ立っていました。甚兵衛はびつくりして、あつ！ といったまま、腰を抜さんばかりになつて、そこに倒れかかりました。するとその真黒なものが、からからと笑いました。甚兵衛は二度びつくりして、よくよく眺めますと、それは一匹の猿でした。

「甚兵衛さん、甚兵衛さん」と猿はいいました。

甚兵衛は口をあぐり開いたまま、猿の顔を眺めていました。それを見て猿はまた笑いだしながら、いい続けました。

「甚兵衛さん、なにもびつくりなさることはありません。私はこの神社に長く住んでいる猿であります。人間のよう口を利くこともできませんし、どんなことでもできます。あなたが毎日熱心にお祈りなさるのを感じて、上手に人形を使うことを教えてあげた

いと思つて、ここにでてまいつたのです。けれどもその前に、あなたに一つお頼みしたいことがありますが、聞いてくださいますか」

そういう猿の声がたいへんやさしいものですから、甚兵衛もようよう安心しました。そして答えました。

「お前さんが私を上 手な人形使いにしてくれるなら、頼みを聞いてあげよう」

そこで猿はたいそう喜びまして、頼みの用をうち明けました。用というのは、大蛇を退治することでした。いつの頃からか、山に大蛇がでてきました、いろんな獣を取つては食べ、猿の仲間までも食べ初めました。それでこの猿は、さまざまに工夫をこらして、大蛇を山から逐い払おうとしましたが、どうしても敵いませんでした。そして甚兵衛に、大蛇退治を頼んだのでした。

「お前はなんでもできるといつたのに、大蛇位なものに負けるのかい？」と甚兵衛はいました。

「はい」と猿は面目なさそうに答えました。「智慧でなら誰にも負けませんが、力ずくのことには困つてしまいます。甚兵衛さん、どうかその大蛇を退治してください」

甚兵衛もそれには困りました。なにしろ相手は大蛇ですもの、へたなことをやれば、こ

ちらが一呑みにされてしまえばかりです。長い間考えこんでいましたが、いい考えを思いついて、はたと額を叩きました。

「そうだ、これなら大丈夫。ねえ猿さん、お前は猿智慧といって、たいそう利巧だそうだが、案外馬鹿だなあ。今私が大蛇を退治てあげるから、見ていなさいよ」

甚兵衛は急いで家へ帰りまして、綺麗な女の人形を一つ取り、その中に釘をいっばいつめて、釘の尖った先が、皆外の方に向くように拵えあげました。それを持って猿の所へもどつてきました。

「そんな人形をなんになさいます？」と猿は不思議そうに尋ねました。

「まあいいから、私のすることを見ていなさい」と甚兵衛は答えました。

彼は猿に案内さして、大蛇のできそうなところへ行き、そこに女の人形を立たせました。そして猿と二人で、大蛇に見つからないような蔭に隠れて、じつと待つていました。しばらくすると、ゴーと山鳴りがしてきまして、向うの茂みの間から、樽のように大きな大蛇が、真赤な舌をペロリペロリだしながら、ぬつと現われできました。大蛇は人形を見ると、それを生きた人間と思ったのでしよう、いきなり大きな鎌首をもたげて、恐ろしい勢で寄つてきました。そして側に寄るが早いか、その大きな身体で、ぐるぐると人形に

巻きついて、カいっぱいにしめつけました。ところが人形には、薄い着物の下に釘がいつぱい、尖った先を外に向けてつまっているのです。いくら大蛇でもたまりません。柔かな腹の鱗の間に、一面に釘がささりまして、そこから血が流れだし、そのまま死んでしまいました。

## 二

首尾よく大蛇退治ができましたので、猿はたいへん喜びました。

「お蔭で山の中の獣は、皆助かります。これから、お約束ですから、上手に人形を使うことを、あなたにお教えしましょう。ただ黙って、私のいうとおりになさらなければいけませんよ」

甚兵衛は承知しました。猿は甚兵衛の家へやってきました。そして家にある人形を皆売ってしまいなさいといいました。甚兵衛は人形を残らず売ってしまいました。すると猿はいいました。

「三日の間、この人形部屋にはいつてはいけません。三日たったらこの部屋においでなさ

い、すると大きな人形が一つ立っています。その人形はなんでも、あなたのいうとおりにひとりでに動きます」

甚兵衛は不思議に思いましたが、ともかくも猿のいうとおりにして、三日間人形部屋の襖を閉め切つて置きました。猿はどこかへ行つてしまいました。三日たつてから、甚兵衛はそつと人形部屋を覗いてみました。すると部屋の真中に、大きなひよつこの人形が立っています。

甚兵衛はびっくりしましたが、猿の言葉を思いだして、手をあげろと人形にいつてみました。人形はひとりでに歩きだしました。それから、踊れといえは踊るし、坐れといえは坐るし、人形はいうとおりに動き廻るのです。甚兵衛は呆れ返つてしまいました。そしてぼんやり人形を眺めていますと、その背中が、むくむく動きだして、中から、猿が飛びだしてきました。

「甚兵衛さん、びっくりなすつたでしょう。なあに、私が中にはいつていたんです。あの人形は空つぽで、背中に私の出入口がついてるのです。大蛇を退治してくださいました、これから私が人形を踊らせますから、それであなたは一儲けなさい。私も山の中より町の方が面白いから、御飯だけ食べさしてくださいれば、長くあなたの側に仕えて、人形を踊

らせましよう」

なるほど猿が中にはいつておれば、人形がひとりでに踊るのも不思議ではありません。

甚兵衛は手を打つて面白がりました。

やがて町の祭礼となりますと、甚兵衛は一番賑やかな広場に小屋がけをしまして、

「世界一の人形使い、独りで踊るひよつとこ人形」という看板をだしました。町の人た

ちは、あの馬鹿甚兵衛がたいそうな看板をだしたが、どんなことをするのかしらと、面

白半分に小屋へはいつてみました。

正面に広い舞台ができていました。間もなく甚兵衛は、大きなひよつとこの人形を

持ちだし、それを舞台の真中に据えまして、自分は小さな鞭を手に持ち、人形の側に立

つて、挨拶をしました。

「この度私が人形をひとりで踊らせる術を、神から授かりましたので、それを皆様にお

目にかけます。このとおり人形には、なんの仕掛もございません」

そういつて彼は、手の鞭で人形を二、三度叩いてみせました。それから鞭を差上げてい

いました。

「歩いたり、歩いたり」

人形は歩きだしました。

「廻まわったり、廻まわったり」

人形はぐるぐる廻まわりました。

「踊おどったり、踊おどったり」

人形はおかしな恰好かっこうで踊おどりました。

「飛とんだり、跳はねたり」

人形は飛とび跳はねました。

見物けんぶつ人は驚おどろいてしまいました。なにしろ人形ひとがが独ひとりで動うごき廻まわるのは、見たことも聞き

たこともありませぬ。皆みな立ちあがつて、やんやと喝かつさい采さいしました。中には不ふ思議しぎに思しう者

もあつて、舞ぶたい台たいを調しらべてみたり、人形けんさを検けん査さしたりしました。けれどももとより、舞ぶたい台たいに

はなんの仕しか掛かけもありませんし、猿さるは人形じんべえの中にじつと屈かがんでいますので、誰だれにも氣きづかれ

ませんでした。そして、やはり、甚じんべえ兵衛べゑは神かみさま様さまから人形ほう使いおその法ほうを教おそわつたということ

になりました。さあそれが評ひょう判ばんになりました、いきにんぎよう「生いき人形じんぎよう」とい

はやされ、町の人たちはもちろんのこと、遠とくの人まで、甚じんべえ兵衛べゑの人形ごや小屋けんぶつへ見物まいに参

りました。

町の祭さい礼れいがすすみますと、猿さるは甚兵衛じんべいに向むかつて、都みやこにでてみようではありませんかとい  
 いました。甚兵衛じんべいもそう思おもつてたところところです。田舎いなかの小さな町まちでは仕方しかたがありません。大  
 きな都みやこにでて、世間せけんの人ひとをびつくりさせるのも楽たのしみです。それでさつそく支度したくをしまし  
 て、だいぶ遠とい都みやこへでてゆきました。

甚兵衛じんべいは、都みやこの一番賑にぎやかな場所ばしょに、直ただちに小屋こやがけをしまして、「世界一の人形にんぎょう使つかい、  
 独ひとりで踊おどるひよつとこ人形にんぎょう」という例れいの看板かんばんをだしました。すると、甚兵衛じんべいの評判ひやうばん  
 はもうその都みやこにも伝つたわつていますので、見物人けんぶつにんが朝あからつめかけて、たいへんな繁はんじよ  
 昌うです。甚兵衛じんべいは得意とくいになつて、毎日ひよつとこの人形にんぎょうを踊おどらせました。

ところがある日ひ、甚兵衛じんべいは例れいのとおり、「歩あいたり、歩あいたり、……踊おどつたり、踊おどつた  
 り、……飛とんだり、跳はねたり」などといつて、自由自じゆうじ在ざいに人形にんぎょうを使つかつていますうち、つい  
 調子ちようしにのつて、「鳴ないたり、鳴ないたり」と口くちを滑すべらせました。けれども人形にんぎょうは一向いこう鳴なき  
 ませんでした。さあ甚兵衛じんべいは弱よわつてしまいました。でも一度いどいいだしたことですから、今いま

さら取消すわけにはゆきません。甚兵衛は泣きだしそんな顔をして、人形の中の猿にそつと頼みました。

「猿や、どうか鳴いてくれ、私が困るから」

「では泣きましょう」と猿は答えました。

そこで甚兵衛は鞭を高く差上げ、大きな声でいいました。

「鳴いたり、鳴いたり」

人形は「キイ、キイ、キヤツキヤツ」と鳴きました。

見物人は驚いたの驚かないの、それはたいへんな騒ぎになりました。「人形が鳴いた」

という者もあれば、「あれは猿の鳴き声だ」という者もあるし、一度に立ちあがってはやし立てました。すると甚兵衛は一きわ声を張りあげていきました。

「今のは猿の鳴き声であります。これからまた他の鳴き声をお聞かせいたします。……さ

あひよつとこ人形、鳴いたり鳴いたり、犬の鳴き声」

人形は「ワン、ワン、ワン、ワンワン」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、猫の鳴き声」

人形は「ニヤア、ニヤア、ニヤア、ニヤア」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、鼠の鳴き声」

人形は「チュウ、チュウ、チュウ、チュチュー」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、狐の鳴き声」

人形は「コン、コン、コンコン」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、狸の鳴き声」

すると見物人は喜びました。誰もまだ、狸の鳴き声を聞いた者がありませんでした。

皆静まり返って耳を澄しました。ところが、いつまでたつても人形は鳴きません。甚兵衛

はまたくり返しました。

「鳴いたり鳴いたり、狸の鳴き声」

それでもまだ人形は鳴きませんでした。鳴かないのも道理です。人形の中の猿は、狸

の泣き声を知らなかったのです。甚兵衛はそんなこととは気づかないで、三度くり返しま

した。

「鳴いたり鳴いたり、狸の鳴き声」

すると人形は大きな声でこういいました。

「狸の鳴き声、知らない知らない、キイ、キイ、キャツキャツ」

それを聞くと、小屋の中は沸き返るような騒ぎになりました。「狸の声を人形も知らない——人形が口を利いた——猿の鳴き声をした」とてんでにいいはやして、見物人のほうで踊りだしました。

甚兵衛は初め呆氣にとられていましたが、やがて程よいところで挨拶をして、その日はそれでおしまいにしました。

甚兵衛と猿と二人きりになりますと、猿は顔から汗を流しながらいいました。

「甚兵衛さん、今日のように困ったことはありません。狸の鳴き声を知らないのに、鳴けとなん遍もいわれて、私はどうしようかと思いました」

「いや私もうっかりいつてしまつて、後で困つたなど思つたが、しかしお前が知らない知らないといつたのは大できだつた」

そして翌日から、踊りや鳴き声を前からきめておいて、それだけをやることにしました。

ところがその都に、四、五人で組をなした盗賊がいまして、甚兵衛の人形の評判をきき、それを盗み取ろうとはかりました。そしてある晩、にわかには甚兵衛の所へ押し入り、眠つてる甚兵衛を縛りあげ、刀をつきつけて、人形をだせと嚇かしました。甚兵衛はびつくりして、あたりを見廻しましたが、猿はどこかへ逃げてしまつて居ませんし、まごまごすると刀で切られそうですから、仕方なく人形のある室を教えました。盗賊どもは人形を奪うと、そのままどこかへ行つてしまいました。

盗賊どもが居なくなつた時、押入の中に隠れていた猿は、ようようでてきて、甚兵衛の縛られてる縄を解いてやりました。けれども盗賊どもが逃げてしまつた後なので、どうにも仕方がありませんでした。ただこの上は、盗賊の住居を探しあてて人形を取り返すよりほかはありません。

それから毎日、昼間は甚兵衛がでかけ、夜になると猿がでかけて、人形の行方を探しました。けれどなかなか見つかりませんでした。ちょうど半月ばかりたつた時、その日も甚兵衛は尋ねあぐんで、ぼんやり家に帰りかけますと、ある河岸の木影に、白髯の占いが卓を据えて、にこにこ笑つていました。甚兵衛はその白髯のお爺さんの前へ行つて、人形の行方を占つてもらいました。

お爺さん(じい)はしばらく考えていましたが、やがてこういいました。

「ははあ、わかつたわかつた。その人形は地獄(じごく)に居る。訳(わけ)はないから取りに行くがいい」

甚兵衛はびつくりして、なおいろいろ尋ね(たず)ましたが、白髯(しろひげ)のお爺さん(じい)は眼(め)をつぶったきり、もうなんとも答(こた)えませんでした。

甚兵衛は家(かえ)に帰(かえ)って、その話を猿(ざる)にいつてきかせ、占(う)いなしゃ(ことば)を二人で考えてみました。地獄(じごく)に居る(い)が訳(わけ)はないというのが、どうもわかりませんでした。二人は一(ひと)晩(ばん)中考(ちゅう)考(こう)えました。そして朝(あ)になると、二人ともうまいことを考え(かん)ぎました。

甚兵衛はこう考え(かん)ぎました。

「これはなんでも、地獄(じごく)に関(かん)係(けい)のある古(ふる)いお寺(てら)か荒(あ)れはてたお寺(てら)に違(ちが)いない」

猿(ざる)はこう考え(かん)ぎました。

「地獄(じごく)のことなら鬼(おに)の思(おも)うままだから、鬼(おに)の人形(にんぎょう)をこしらえたら、それであの人形(にんぎょう)が取りもどせるだろう」

それから、猿は大きな鬼の人形をこしらえ、甚兵衛は荒れはてた寺を尋ねて歩きました。ちようど都の町はずれに、大きな古寺がありましたので、甚兵衛はそつと中にはいりこんで様子を窺つてみますと、畳もなにもないような荒れはてた本堂のなかに、四、五人の男が坐つて、なにかひそひそ相談をしていました。よく見ると、それがあの盗賊どもではありませんか。甚兵衛はびつくりして、見られないように逃げだしてきました。そして猿にそのことを告げました。

「もう大丈夫です」と猿はいいました。「人形は盗賊どもの所にあるに違いありません。私が行つて取りもどしてきましょう」

甚兵衛は危なかりましたが、猿が大丈夫だというものですから、そのいうとおりに従いました。

晩になりますと、二人は鬼の人形をかついで、盗賊の古寺へ行きました。それから猿は人形の中にはいつて、一人でのそのそ本堂にやつてゆきました。本堂の中には蝋燭が明るくともつていましたが、盗賊どもは酒に酔つ払つて、そこにごろごろ眠つていました。

「こら！」と猿は人形の中から大きな声でどなりました。

盗賊どもはびつくりして起きあがりますと、眼の前に大きな鬼がつつ立つてるではありませんか。みんな胆をつぶして、腰を抜してしまいました。

鬼の人形の中から、猿は大きな声でいいました。

「貴様どもは悪い奴だ。甚兵衛さんの生人形を盗んだらう。あれをすぐここにだせ、だせば命は助けてやる。ださなければ八裂きにしてしまうぞ」

「はい、だします、だします」と盗賊どもは答えました。

やがて盗賊どもは、生人形を奥から持つてきました。首はぬけ手足はもぎれて、さんざんな姿になっていました。それも道理です。盗賊どもは人形を踊らして、金儲けをするつもりでしたが、中に猿がはいっていないんですから、人形は踊れようわけがありません。盗賊どもは腹を立てて、人形の首を引きぬき、手足をもぎ取って、本堂の隅つこに投げ捨てて置いたのです。それを見て猿は、鬼の人形の中からどなりつけました。「不都合な奴だ。しかしおとなしく人形をだしたから、命だけは助けてやる。どこへなり」といつてしまえ。またこれから泥坊をすると許さんぞ」

盗賊どもは震えあがって、逃げうせてしまいました。

猿は鬼の中からでてきて、甚兵衛と二人で、壊れた人形を抱いて、非常に悲しみました。

た。けれども、いくら悲しんでもいままさら仕方はありません。二人は壊れた人形を持って、田舎の町へ帰りました。

甚兵衛はもうたいへん金を儲けていましたし、壊れた人形を見ると、再び人形を使う気にもなりませんでした。猿も都を見物しましたし、そろそろ元の山にもどりたくなつて折でした。それで二人は、壊れた人形を立派に繕つて、それを山の神社へ納めました。猿は山の中へもどりました。

甚兵衛は、もう誰が頼んでも人形を使いませんでした。そして山からときどき遊びにくる猿を相手に、楽しく一生を送りましたそうです。



# 青空文庫情報

底本：「天狗笑い」晶文社

1978（昭和53）年4月15日発行

入力：田中敬三

校正：川山隆

2006年12月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 人形使い

豊島与志雄

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>